

近江屋弥七郎家文書所収巨智部英三郎関係資料

徳永 宏

はじめに

本稿では、長崎市長崎学研究所在平成三十年に取得した資料「近江屋弥七郎（井刈弥七）家文書」（以下、近江屋文書とする）のうち巨智部英三郎関係資料について紹介する。

同資料は、古書店から一括で購入したもので、約二百点からなる。

そのうち、本稿で紹介する資料は京都糸割符宿老を勤めた巨智部英三郎忠陽（以下、英三郎とする）が近江屋（井狩）弥七郎（以下、弥七郎とする）らへ宛て出した書状（断簡を含む）や口上書、覚など約五十点である。

近江屋は、京都で薬種商を営んでいるが、同家の弥七郎（以下、弥七郎）の略歴は不明である。近江屋文書のうち、明治以降の資料から明治十六年時点で京都府上京区第十九組長尾町第六番戸に所在していたことがわかるが、いつから同地に居住し薬種商を営んでいたのかは不明である。

本稿で取り上げる英三郎は、その息子忠承がまとめた「巨智部家ト長崎」によれば、京都糸割符請払役として天

保二（一八三一）年に初めて京都から長崎へ下向し、その後、永らく糸割符宿老を勤め、慶応二（一八六六）年に長崎で亡くなっている。

なお、英三郎が長崎在勤中の弘化二年から慶応二年まで書き綴った日記である「要録」二十二冊が長崎歴史文化博物館に収蔵されている。³ この「要録」には、糸割符宿老の業務、長崎会所関係者や知人との交遊、そして京都の留守宅や糸割符会所関係者や親類等との書状及び金品のやり取りなどが克明に記録されている。前述の弥七郎との書状のやり取りも同様に記載されている。「要録」のうち、天保十六（弘化二）年分は、長崎近世文書研究会により翻刻文が出版されている。⁴

なお、「要録」から得られる巨智部家の系譜については、長田和

表一 要録一覧

請求番号	名称	干支	西暦
17 45 - 2	長崎勤番道中要録 天保 15 年	辰	1844
17 44 - 1 1	要録 天保 16 年 (弘化 2 年)	巳	1845
17 44 - 1 3	要録 弘化 3 年	午	1846
17 44 - 1 4	要録 弘化 4 年	未	1847
17 44 - 1 5	要録 弘化 5 年 (嘉永元年)	申	1848
17 44 - 1 6	要録 嘉永 2 年	酉	1849
17 44 - 1 7	要録 嘉永 3 年	戌	1850
17 44 - 1 8	要録 嘉永 4 年	亥	1851
17 44 - 1 9	要録 嘉永 5 年	子	1852
17 44 - 1 10	要録 嘉永 6 年	丑	1853
17 44 - 1 11	要録 嘉永 7 年 (安政元年)	寅	1854
17 44 - 1 12	要録 安政 2 年	卯	1855
17 44 - 1 13	要録 安政 3 年	辰	1856
17 44 - 1 14	要録 安政 4 年	巳	1857
17 44 - 1 15	要録 安政 5 年	午	1858
17 44 - 1 16	要録 安政 6 年	未	1859
17 44 - 1 17	要録 安政 7 年 (万延元年)	申	1860
17 44 - 1 19	要録 文久 2 年	戌	1862
17 44 - 1 20	要録 文久 3 年	亥	1863
17 44 - 1 21	要録 文久 4 年 (元治元年)	子	1864
17 44 - 1 22	要録 元治 2 年 (慶応元年)	丑	1865
17 44 - 1 23	要録 慶応 2 年	寅	1866

之編「長崎在番京糸割符宿老巨智部英三郎補遺」⁵及び長田和之編「巨智部英三郎忠陽子息巨智部忠承氏について」⁶がある。

また、英三郎が長崎で得た海外情報については、岩田みゆき「幕末期における長崎貿易商人の海外情報 ―巨智部忠陽長崎在番日記『要録』の検討―」⁷で紹介されている。

さらに、岩田は「幕末期長崎在番京宿老の長崎―京都間の書状取次について ―長崎奉行所関係の書状を中心に―」⁸で長崎・京都を結ぶ糸割符宿老の役割を明らかにしている。

吉良史明「幕末異国情報の伝播と長崎檀園社中」上・下⁹では、長崎に来ていた肥後の国学者中島広足と当時京都にいた国学者伴信友との交遊について英三郎が関係していたことを明らかにしている。本稿では長崎に在勤していた英三郎から京都にいる彼の親戚筋にあたる弥七郎らへ宛てて出された書状などに書かれている情報の内、長崎における唐蘭貿易の状況や、外国人の漂着情報、弥七郎らへ送られた長崎貿易による輸入品等に着目し、幕末期の長崎における対外関係や唐蘭貿易の状況について考察したい。なお、紙幅の関係上、資料の引用箇所は、該当する部分にとどめている。

一 対象資料の概要

英三郎から弥七郎らへ宛て送った書状等は、「長崎到来御書状用向書」と記されていた封筒に一括して収められており、今回紹介する資料は、表二のとおりである。

なお、書状は、いずれも年紀を欠いているが、その一部には日付に干支が記載されているため、「要録」に記載されている京都に宛て書状を差立てた記事から年号を特定又は推察することができる。

特定できたのは、酉年にあたる嘉永二（一八四九）年の書状である。例えば、酉年五月二十三日付書簡（市学五〇五）¹⁰に

先達而為登候白糸織帶地并薩摩のたばこ相届キ候旨

四月三日出二而柳ごふり江古着の類入て誉田屋由兵衛便今為登申

とあるが、このことについて、「要録」の同年二月六日条の

誉田屋由兵衛便今為登候白糸織帶地 沓 光悦老人江遣物当

という記事と、閏四月三日条の

一 誉田屋由兵衛當春今呉服代金五両相渡し候事但同人近く出立

登京二付留主宅江柳合利着頼入言伝候也書状添置候事

また、五月二十三日条の

一 京都江西九番状差立候事

という記事に対応するものと考えられる。¹¹

発信者である英三郎と受信者である弥七郎の関係は、縁戚関係にあることが西八月一八日付書状（市学四九六）に次の通り記されている。

仲ケ間内役方親類等江年忌之餅を為御

配被下度凡左之通二願頼由認申候外二失念の所も

表二 巨智部英三郎等発信資料一覧

番号	枝番	資料名	発信者（受信者）	員数	単位	月日
市学 491		書簡	英三郎（井狩弥七郎、光悦老尼）	1	通	4月21日
市学 492		書簡	巨智部英三郎（井狩弥七郎、光悦老人）	1	綴	7月25日
市学 493		封筒	巨智部英三郎（京都留主宅）	1	枚	12月27日
市学 494		書簡	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	綴	酉3月5日
市学 495		書簡	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	通	酉9月6日
市学 496		書簡	英三郎（弥七郎、光悦老人）	1	綴	酉8月18日
市学 497		口上書	巨智部英三郎（井狩弥七郎）	1	通	正月19日
市学 498		口上書	英三郎（光悦老尼）	1	通	3月21日
市学 499		口上書	英三郎（光悦老公）	1	通	申6月22日
市学 500		口上書	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	通	8月8日
市学 501		口上書	巨智部英三郎（光悦老尼、井狩弥七郎）	1	通	申7月27日
市学 505		書簡	英三郎（光悦老人、弥七郎、其外皆々）	1	綴	酉5月23日
市学 506		口上書	英三郎（光悦老人）	1	通	3月23日
市学 507		書簡	英三郎（弥七郎、光悦老尼）	1	綴	4月28日
市学 508	2	書簡	英三郎（弥七郎）	1	通	申9月20日
市学 508	3	覚	英三郎（弥七郎）	1	通	申3月12日
市学 510		書簡	英三郎（光悦老、弥七郎）	1	綴	未12月27日
市学 511		書状（断簡）	長崎巨智部（京都留主番）	1	通	
市学 512		書状	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	綴	10月12日
市学 513	1	書状	英三郎（光悦老、弥七郎）	1	通	酉2月朔日
市学 513	2	口上書	英三郎（弥七郎）	1	通	
市学 514		包紙	京都 伊藤権之助（巨智部英三郎）	1	枚	
市学 515		包紙	英三郎（京都巨智部留主宅）	1	枚	3月12日
市学 516		書状	巨智部忠陽（井狩宿力勝大人）	1	綴	申3月12日
市学 517		書状	巨智部英三郎（井狩弥七郎、光悦老尼）	1	綴	申6月9日
市学 519		口上書	（井狩）	1	通	
市学 521		書状	英三郎（弥七郎、光悦老尼）	1	通	未正月8日
市学 522		書状	巨智部英三郎（光悦老人）	1	通	申9月28日
市学 523		書状	伊藤	1	通	4月5日
市学 524		書状（断簡）		1	通	
市学 525		書状（断簡）	辻学二（井狩弥七老師）	1	通	5月23日
市学 530		書状	渡なへ（井狩）	1	通	8月28日
市学 531		封紙	巨智部英三郎（京都・留主宅）	1	枚	23日
市学 534		書状及び書付	龍助（弥七郎）	4	枚	6月20日
市学 535	2	覚	巨智部英三郎（井狩弥七郎）	1	通	巳10月
市学 536		書状	井学二（井加里主人）	1	通	3月5日
市学 537		書状	英三郎（光悦老尼）	1	通	6月10日
市学 538		書状（断簡）		1	枚	
市学 539		書状	英三郎（光悦老尼）	1	通	8月18日
市学 540	1	書状	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	通	申4月12日
市学 540	2	書状	英三郎（光悦老人、弥七郎）	1	通	壬4月3日
市学 541		書状	英三郎（おばた 弥七郎）	1	通	11月20日
市学 542		書状	英三郎（光悦老尼、弥七郎）	1	通	5月16日
市学 543		書状（断簡）		1	通	
市学 544		書状	英三郎（光悦 弥七郎）	1	通	10月13日

候ハ、御心添可被下候

上 清水藤右衛門殿 下 森川良右衛門 殿

(中略)

右之外親類ハ凡左之通り

新町高辻 井喜右衛門 靱町五条下ル 鰻屋源二郎

堺町丸太下 高橋尽右衛門

曇月両家

白勘

井狩両家

なお、書状の宛所に弥七郎と並んで「光悦老尼」なる人物がよく見受けられる。現時点で弥七郎との関係は不明であるが、彼の近親者である可能性が高いと考えられる。

二 資料の内容

(一) 外国人の漂着

幕末には、アメリカの捕鯨船などが日本近海に來航し、そのうち、船が遭難し、蝦夷地を含む日本国内に漂着した者が長崎へ回送される事態がしばしば発生していた。

七月二十五日付 書状(市学四九二)

漂着致し候アメリカ人同所分船ニ而役人送り來り七月九日爰元着船ニ相成申候右者當年帰帆之蘭船へ言伝ニ相成候様子ニ御座候右アメリカ人七人也オランダのきたないのニ御座候忝人者都中ニ

イレグクロ致し有之候

本件は、『増補長崎略史 上巻』年表第八の弘化四年十月の次の記事に該当するものと推測される。¹²

同月 去年蝦夷エトロウに漂着せる米人六人を蘭国船に託して本国に送る 一人は本年七月長崎に病死す

八月八日付 口上書(市学五〇〇)

○當年も又々アメリカ人松前分船ニ而拾五人一昨六日送り來申候右ハくじら取船が松前へ流され候よしに候當年紅毛船分御帰シ可相成奉存候松前様にはよほど御物入ト奉存候

本件は、『増補長崎略史 上巻』年表第八の嘉永元年十月の次の記事に該当するものと推測される。¹³

八月 松前候より漂着米人十五人を送付す本年五月松前に上陸したるものにて其一人は縊死、一人は病死せり

申(酉カ) 四月十二日付 書状(市学五四〇一一)

○三月廿五日私新地へ出役中ニ異船之進注有之大ニそふどう致し仕役もやめニ相成申候然る処翌廿六日ニアメリカ船壹艘入津仕候則昨申年松前分長崎江送りニ相成候アメリカ人をもらい参り候由則四月四日御渡し相成六日出帆致し申候諸御大名方追々

ニ御出張其外御飛脚などにて殊之外渋難仕候也しばらくハどう
成るかと案じ申し候処先以穩ニ相済大慶ニ奉存候則アメリカ人
御糺口書入り読候まづは無異之段為御知申上度御座候以上

英三郎

申四月十二日

光悦老人

弥七郎 様

本件は、嘉永元（一八四八）年にアメリカの捕鯨船が蝦夷地に漂
着し、その乗組員を翌年長崎へ来航したアメリカの軍艦プレブル号
が引き取った一件を述べており、当時の長崎の緊迫した雰囲気を伝
えている。

（二）唐蘭船の入港状況

英三郎が在勤していた幕末には、長崎へ来航する唐船の数が減少
傾向にあり、唐船の来航に気をもむ様子が窺える。

七月二十五日付 書簡（市学四九二）

六月廿五日白帆注進有之候処翌廿六日紅毛船壹艘入津致し候唐船
に今沙汰無し欠年かと奉存候

申七月二十七日付 口上書（市学五〇一）

唐船ハ迎も當年も六ヶ敷存居候処昨廿六日夕方一艘入津致し候式
艘仕出しのように御座候先以唐紅毛ともに入津ニ相成大慶奉存候
長崎ハ何分唐船参り不申而ハ大ニ迷惑候土地ニ御座候

未十二月二十七日付 書簡（市学五一〇）

當夏船入津なしニ而思話敷品も無し右延引仕候故御仕免可被下候兼
而御頼綾金巾も冬船ニ有之候間為差登候様可仕候

酉二月朔日付 書状（市学五一三―一）

○唐船も三艘共ニ入津ニ相成大慶ニ御座候乍去此節は仕役中而
豊勤御座候

日付無 口上書（市学五一三―二）

唐船も三艘共ニ入津ニ相成大慶ニ御座候

未正月八日付 書状（市学五二二）

唐船も五艘仕出候也十二月廿九日壹艘と正月五日ニ壹艘と入津致
候諸船も追々這入可申候正月二日分仕役相始申候いそがしい事
御案可申候

(三) 貿易品の市況

英三郎は、糸割符宿老という立場上、輸入品の価格を知りうる立場にあったため、商品の価格について感想を述べている。

四月廿八日付 書簡(市学五〇七)

○壺番わり入札ことく高直二見へ申候然るに格別の損も無之様子ニ御座候砂糖類ハ損の様子也氷砂糖壺斤式朱の子ニ付申候ア、恐ろしやく

申三月十二日付 書状(市学五一六)

奥嶋更紗之儀被仰下奥嶋はけしからず高直故やめに致申候更紗とんと小形無し昨年紅毛方之品小形撰取置候壺反有之右ヶ包為登可申候小紋ハ至而の小形ニ候得共地白ニ御座候得ハ思召ニ叶不申候ハ、其俣御預置可被下候何れ近々為登方取斗可申候間先御覽可被下候

(中略)

○申壺番割入札も相済此セつ荷渡最中ニ而御座候何もかも高い事ニ御座候

申九月廿日付 書簡(市学五〇八一二)

○奥嶋之儀先年為登候品上品過候よし式番か三番にて宜敷由然るに當年ハ三番無御座候式番は有之候へとも嶋大キク其上壺反

三百匁も掛り申候二付見合申候也何れ又明年なしては御座候迎も御さし直儘にてハ無之候左様思召可下候

未正月八日付 書状(市学五二一)

御頼越之唐方更紗は承知仕候サンゴ珠は先便にも申上候通至而高直也夫でもよいならいふておくれいつでもかふて上升○唐船も五艘仕出候也十二月廿九日壺艘と正月五日ニ壺艘と入津致候諸船も追々這入可申候

なお、英三郎の「要録 嘉永二年」¹⁴のうち、嘉永二年三月六日条には、「京都江西四番状差立候事 但 落札帳写 壺通」とあり、輸入品の落札価格を京へ知らせていることが分かる。

(四) 糸割符会所関係者等の往来

英三郎と同じく京都の糸割符請払役として長崎へ下向していた者や他地域の宿老達が役職の交代等に伴い長崎と京都若しくは派遣元を往来しているがその消息も伝えている。ただ、弥七郎が京都の会所とかかわりがあったのかは不明でこのような情報をなぜ伝えているのかは残されている書状などからは窺い知ることとはできない。

酉八月十八日付 書簡(市学四九六)

江戸同役山際藤之助交代引継相済八月八日爰元出立

山際藤之助は、江戸糸割符宿老で嘉永二（一八四九）年に同役の秋田久米蔵と交代している。¹⁵

未十二月廿七日付 書簡（市学五一〇）

○林氏江戸行二付十二月五日上京七日出立有之候よし何れ帰りニ京滞留可有候同人至而入魂ニ致し候間御逢候ハ、毎々セ話ニ相成よろこびますと御挨拶可被下候御地は清水江戸行のよしかく年ニ而ハセ話敷可有之奉存候

（中略）

○八里昨年帰京ニ付万端様子御聞取可申候伊藤も春ハ二月中比迄手代出立之由ニ御座候おつと様も嘸々御願と奉存候伊藤ハ十五六才の由是からおつと様の様ニなり舛ヲトツサンハ女を買ニ斗居てゝ御座り升といわれそふじゃアハ……

申三月十二日付 書状（市学五一六）

伊藤氏も三月四日ニ崎着被致申候

申七月廿七日付 口上書（市学五〇一）

八里氏も七月朔日ニ豊後へ乗船之趣最早帰京と奉存候（中略）同人并吉田宇八郎殿も追々帰京ニ付面々御聞取可被下候

申九月廿日付 書簡（市学五〇八一二）

八里氏七月十九日帰着ニ付役方中御相談有候

八里氏は京都糸割符請込役で、弘化五（一八四八）年（嘉永元年）に京糸割符請込役并御物反物并糸目利兼帯として京都の会所から派遣された伊藤氏と交代している。¹⁶

申九月廿日付 書簡（市学五〇八一二）

○御向ひ上田氏に七八か年学僕被致候辻寛治と申仁兼々長崎表へ医学参度存念ニ候処幸ひ此節平戸江同道人有之候ニ付思ひ立て候よしニ付無拠は御頼ニ而十月比は爰元へ被参候趣いさゝ承知仕候医者方へ奉公致度旨且思話敷医師無之候ハ、役人方ニ而も不苦候よし何れ成ともまつ出崎之上相談可仕候半年や二年位ハ我宅ニ被居候ても苦敷ハ無之候何れ調之土取計可申候金銀取遣候儀ハ相尋候様被仰下承知仕候至而正直成仁物之由重畳の事ニ御座候医学稽古只、何れ医者之方ニ無之而ハかけ稽古ハ思話敷間敷候其上當地へたんとく、医学稽古ニ見へ候へ共何れも医学ハ稽古できず酒と女と斗上達ニ而帰り掛ケハただかゝ多ク御座候右様の上達ハイラヌ事也何れも本人出崎ニ候ハ、其辺の事も可申聞候付而ハ往来なしニてハ滞留六ヶ敷候ニ付而拙の手代とか下男とかにて届致し可申哉御相談申寄候自然奉公口無之候ハ、此節平戸同道人と帰京可申付様被仰下致遣し候様可仕候得ハ御安意可被下候永々御なじ之ニ付無拠之御頼被成候よし右様之ハ誰も有事ニて御座候へはいさゝ承知仕候也猶後便追々可申上候

十月十二日付 書状（市学五一二）

○兼而御申越有之候丹後人辻学二殿

十月五日夕無滞会所へ差召也

致面会候御添書も受取申候向々

奉公御願置候得共いまたにあやしき

所も無之候故我子方ニ留置居

申候尚追々片付方相成候ハ、為

承知可申上候同人々壺封差立候

御落手可申候

辻学二は、丹後国出身で医学修行のため長崎へ遊学しているが、英三郎の手代として一時期彼のもとで働いている¹⁷。英三郎が、医学修行よりも酒色におぼれるのではないかと心配しているのは、長崎の遊廓の存在があることに起因しているのではないか。なお、辻自身も弥七郎に宛て書状を出し近況を伝えている¹⁸。

（五）輸入品の贈答・送付

英三郎は、しばしば唐蘭貿易の輸入品を弥七郎らに贈答品などとして送っており、主に砂糖類や反物類が見受けられる。その例は、次のとおりである。

ア 白砂糖

酉三月五日付 書簡（市学四九四）

白砂糖御請取被成候

三月二十一日付 口上書（市学四九八）

少しなから壺番白ざとうさし上申候御なめ可被申

四月廿八日付 書簡（市学五〇七）

さとう廿こ斗老人へ上候外ニ土産用ニせんと拾三箱入壺箱ことつけ候是ハ御行付置可申候

未十二月廿七日付 書簡（市学五一〇）

○當夏誉田屋儀八婦京之節唐染付四段重砂糖るい入レテ為登置候右ハ無事着致候哉御尋申候

十月十二日付 書状（市学五一二）

九月六日出ニて老人江出嶋白おさ斗あけ候其節ニかたひら三ツ但シ草柳紋付ニ上布紺袴壺越後嶋壺ツ為登置申候昨年迄御洗張御仕立可申候様御頼申候

未正月八日付 書状（市学五二一）

さとう三斤入箱テレフ切御請取相成候旨被仰知安心仕候

巳十月付 覚（市学五三五―二）

覚

大坂廻船大徳丸今御焼印付積登候

一 出嶋白砂糖 壺櫃 但八拾斤入

※他、弁柄更紗 壺反

代六拾七匁五分五毛

一 い更紗 壺反

代七拾壺匁六分四厘五毛

一 丁子 三斤

代百壺匁壺分

八厘八毛五弗

一 広巾上白金巾

出島白砂糖他を大坂廻船大徳丸で積み登らせそれぞれ渡し方を依頼しているが、本件については、弘化二（天保一六）年の「要録」に關連する記事がある¹⁹。

イ 反物

西八月十八日付 書簡（市学四九六）

出島白壺継綾金巾式反為登候様被仰越承知仕候

申六月二十二日付 口上書（市学四九九）

一 奥嶋裕袴壺ツ

右御ついでニ洗張御頼申し宅ニ御願置可被下候

酉五月廿三日付 書簡（市学五〇五）

先達而為登候白糸織帶地并薩摩のたばこ相届キ候旨爰今申来り候右は老人思召ニ叶ひ候哉いかがやと案じ居申候

四月廿八日付 書簡（市学五〇七）

琉球反物羽織并小立もの御頼申候処染被仰付被下候よし御面倒恐入候よろしく御ねかひ申上候

四月廿八日付 書簡（市学五〇七）

○御頼越の上品中壺反四月五日才領便今差立候尤落札高直ニ候得共宜敷品為登候様御申越ニ付上物為登候様右様之品ハ春と秋との入札之節ならでハ手ニ入かね其外店にてかい候而は中々高直ニ御座候左様思召可被下候代料相拂置申候追而御勘定可仕候右便ニ老人江たばこ式ツ差上候

申九月二十日付 書簡(市学五〇八一二)

吉田宇便分蘭口上更紗壹反為登候処右は白地ニ付ゆかた
めいてイヤト被仰越承知仕候兼而小形と被仰越候ニ付至極小形之
所差上候義ニ御座候御不用ニ候ハ、其俣御預り置可被下候夫故に
此節又、荷きか茶之品申遣置申候何れも形が大キク困り申候
也

十月十二日付 書状(市学五一二)

○依御地井九郎便ニ壹番新織奥嶋袴カ地洗張出来十月三日着致申
候御安心可申候

日付無 口上書(市学五一三一二)

御頼越候鯨手板付ニて為登申候

申六月九日付 書状(市学五一七)

○右卯八郎殿便ニ左之通りことづけ申候よろしく御願申上候

壹番新織奥嶋袴ばかま壹ツ 是ハ洗はり御頼申候仕立ハ長伊ニて

仕可申候

朝せん白紬 壹反

是ハ帷子ニ成候積り也のりをおとさせ御
覧可被下候其上にて帷子ニ成そふと候ハ、
白上り五ヶ所定役付ニして色ハ可然御染さ

但柿色 玉子紺ナドハ せ被下候様御頼申候
イヤニテ候

ウその他輸入品

申七月廿七日付 口上書(市学五〇一)

先達而申上置候通り御用皮文庫壹并漆とも宅江御届可相成御請
取置可被下候

(六) 薩摩藩の琉球貿易長崎仕法等に関する情報
(藩内で生産される煙草)

英三郎は、しばし、薩摩藩蔵屋敷に出向いていた。これは薩摩藩
が琉球貿易により中国から輸入した商品を長崎で売り捌く際に長崎
会所が関わっており、時期により異なるが入札や荷渡し等の業務も
行っていた。そのせいか、彼は薩摩藩や琉球貿易にかかる産品を弥
七郎へ送っている。

西五月二十三日付 書簡(市学五〇五)

先達而為登候白糸織帯地并薩摩のたばこ相届キ候旨

三月二十三日付 口上書(市学五〇六)

さつまの田葉粉八半巴さし上申候ちとからふ御座候

西二月朔日付 書状（市学五一三一―）

○先便ニも御懸合申寄候昨申六番割琉球産物虫糸御頼越ニ付上品之所多りとらセ除置申候便り無しニ付いまた手元ニ有之候便宜次第為登可申候

右代銀

天肥虫糸壹斤貳合貳夕

代八百九拾四匁六分四厘五毛

當節為替会所江為登候内今引取申候御持出可被下候宜御頼申候已上

日付無 書状（断簡）（市学五二四）

先達而御願被置候天〔紀カ〕 鯨壹わ長崎表江申遣置候処
昨冬除置候

最後に

今回の近江屋文書の確認により、英三郎の要録に記された京都・長崎間のヒト・モノ・情報往来がより詳細に明らかになったといえる。ただ、惜しむらくは、弥七郎から英三郎へ宛てた書状等は見つかっていないため、弥七郎の薬種商としての日常や英三郎をはじめとする周囲の人間関係や消息について十分に把握するまでには至っていない。今回は、すべての資料の解説までには至っていない

ので、今後の課題としたい。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり、資料の閲覧をさせていただいた長崎歴史文化博物館、また、要録他巨智部家の関係資料について御教示いただいた長崎県文化振興・世界遺産課の石尾和貴氏に厚く御礼申し上げます。

（長崎市文化財課シーボルト記念館長）

注

- 1 種痘証（長崎歴史文化博物館蔵、市学六四二―一）
- 2 長崎歴史文化博物館蔵 一七 四八―三
- 3 長崎歴史文化博物館蔵 一七 四四―一 一―二三
- 4 長崎近世文書研究会編『長崎史料叢書』第十集（長崎近世文書研究会、平成二十年）
- 5 長田和之編「長崎在番京糸割符宿老巨智部英三郎補遺」（『洋学史研究』第二十号、洋学史研究会、二〇〇三年）
- 6 長田和之編『巨智部英三郎忠陽子息巨智部忠承氏について』（『洋学史研究』第二十四号、洋学史研究会、二〇〇七年）
- 7 岩田みゆき「幕末期における長崎貿易商人の海外情報 ―巨智部忠陽長崎在番日記『要録』の検討―」（『青山史学』第三十九号、青山学院大学文学部史学科研究室、二〇二一年）
- 8 岩田みゆき「幕末期長崎在番京宿老の長崎―京都間の書状取次について ―長崎奉行所関係の書状を中心に―」（『青山史学』第四十二号、青山学院大学文学部史学科研究室、二〇二四年）
- 9 吉良史明「幕末異国情報の伝播と長崎樫園社中」上・下（『語文研究』第百十六号・第百十七号、九州大学国語国文学会、二〇一三年・二〇一四年）
- 10 この番号は、長崎歴史文化博物館において保管している長崎学研究所収集資料の請求番号である。
- 11 長崎歴史文化博物館蔵 一七 四四―一 六
- 12 『増補長崎略史上巻』長崎叢書三（長崎市役所、一九二六年）三百二十七頁
- 13 前掲注12、三百二十七頁
- 14 長崎歴史文化博物館蔵 一七 四四―一 六
- 15 巨智部忠陽筆「要録 嘉永二年」（長崎歴史文化博物館蔵 一七 四 四―一 六）
- 16 岩田みゆき「幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係」（『青山史学』第四十一号、青山学院大学文学部史学科研究室、二〇一三年）
- 17 前掲注16
- 18 五月二三日付井狩弥七老師宛辻学二書状（断簡）（長崎歴史文化博物館蔵、市学五二五）
- 19 三月五日付井狩弥七郎宛（辻）学二書状（長崎歴史文化博物館蔵、市学五三六）
- 19 長崎歴史文化博物館蔵、一七 四四―一 一